

セッション3 <第2分科会>記録

「授業が変わる、学校が変わる学習評価～知的障害教育における組織的・体系的な学習評価を促す方策について考える～」

実践報告

- 四ツ永信也 氏（鹿児島大学教育学部附属特別支援学校教諭）
加志村直子 氏（京都府立舞鶴支援学校教諭）
東内 桂子 氏（広島県立庄原特別支援学校校長）

指定討論

- 菅野 敦 氏（東京学芸大学教授）

趣旨説明

- 尾崎 祐三 （国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員）

研究報告

- 松見 和樹 （国立特別支援教育総合研究所主任研究員）

司会

- 武富 博文 （国立特別支援教育総合研究所主任研究員）

第2分科会ではまず、尾崎上席総括研究員より研究趣旨説明がなされた。次に松見主任研究員より、研究報告がなされた。次に上記3名の実践報告者から、自校における学習評価の実践について報告がなされた。

四ツ永氏からは、鹿児島大学教育学部附属特別支援学校における授業研究を基軸とした学習評価の在り方についての報告がなされた。組織的・体系的に日々の指導や教育課程を改善するために、授業づくりのPDCAサイクルと授業研究の関連を整理した。また、学校教育目標における「育てたい3つの力」と観点別学習評価の4観点（以下、4観点）との関連を整理し、授業研究による単元指導計画改善の実践例、成果と課題について報告がなされた。

加志村氏からは、京都府立舞鶴支援学校における児童生徒につけたい力の整理からまとめた、学校独自の学習評価の2観点について説明がなされた。また、学習評価を児童生徒の支援に活用する実践として、二分の一成人式、マナー検定、保護者と連携した家事の学習といった、ほめる仕掛けづくりや、高等部の作業学習における自己評価の実践について報告がなされた。

東内氏からは、広島県立庄原特別支援学校における組織的・体系的な学習評価の実践について報告がなされた。学習指導略案や単元計画の様式に、その授業や単元に含まれる教科の内容、個々の児童生徒の目標や変容、授業や単元の評価等を記入する項目の付加、単元構成表や単元系統表を作成し、小・中・高等部それぞれの単元の内容の整理、校長の諮問機関として教育課程検討会議の立ち上げ等といった実践について報告がなされた。

<指定討論>

指定討論の菅野氏からは、知的障害教育の学習評価に関する課題として、小中高等部段階で一貫した学習評価の観点、学習評価を授業や教育課程の改善に活かすシステムを明らかにすることがあるとの指摘がなされた。また、学習評価の概念、目的、方法の種類について整理した説明がなされた。さらに、知的障害教育における観点別学習評価の課題として、関心・意欲・態度といった外在的には見えにくい観点の評価方法などについて指摘がなされた。

(以上、要項 P.16 参照)

<参加者との質疑応答>

参加者：四ツ永氏が発表した、鹿児島大学教育学部附属特別支援学校における「育てたい3つの力」と4観点の関係についてももう少し詳しく説明してほしい。

四ツ永氏：学校教育目標達成を目指した小中高一貫した指導のための、130回の授業研究会などをもとに整理した。

参加者：自校でも4観点を用いた学習評価を行っている。しかし、重度の障害がある児童生徒の、特に関心・意欲・態度といった内面についての評価が難しいと思っている。その点についてご意見いただきたい。

四ツ永氏：毎回の授業で4観点すべてを評価することは難しいと思う。そのため、単元内の授業ごとに、4観点のいずれかの観点について中心に評価している。関心・意欲・態度については、個人目標で具体的な姿を表したり、どの学習活動で評価するのか検討したりするようにしている。

加志村氏：目標を立てて努力する、振り返るなどが関心・意欲・態度のあらわれと捉えている。教師が関心・意欲・態度を評価できる場面を設定するようにしている。

東内氏：重度の障害がある児童生徒の内面の学習評価についても、今回の取組をもとに整理できるのではないかと考えている。

参加者：4観点の相関性を明確にすれば、学校独自の観点でも4観点行ったとしてよいのかどうか。

尾崎上席総括研究員：目標に準拠した評価であり、4観点と学校独自の観点の関連性が明確にできれば、独自の観点でも良いと思う。ただ、これから自校に学習評価の観点を導入するならば、4観点を導入してほしい。

<まとめ>

尾崎上席総括研究員：知的障害教育における観点別学習評価の意義として、児童生徒が様々な場面で思考し、判断し、表現していること、児童生徒がこれまでに学んだ知識・理解をどのように活用しているのか等が見えてくる。関心・意欲・態度については、表し方が個々の児童生徒により異なる。そのことに気付くことが教師の役目である。